中国山地の歴史文化資源の掘り起こし
とネットワーク化調査報告書

平成２７年３月

中国経済連合会

目　次

序章　　調査の目的 ･･･ 1

第１章　「中国山地歴史文化回廊」の作成･･･ 2
【別紙とりまとめ】

第２章　市町からみた歴史文化資源の評価～市町アンケート調査･････････････････････ 3

第３章　歴史文化資源を活用した地域振興に関する事例調査･････････････････････････ 9

第４章　歴史文化資源を活かした中国山地地域の観光振興･････････････････････････ 28

別図

序章　調査の目的

平成 25 年３月に松江自動車道（尾道松江線の宍道－三次東 JCT 間)、鳥取自動車道（姫路鳥取線の鳥取・佐用 JCT 間)、平成 26 年３月に尾道自動車道（尾道松江線の吉舎－三次東 JCT 間）が開通した。平成 27 年には中国横断自動車道が全線開通することにより、中国地域の南北軸が新たに構築され、日本海側と瀬戸内海側の両方から中国山地地域がより身近な場所となろうとしている。これにより、これまで海沿いの地域と比べて注目される機会が少なかった中国山地地域の歴史文化資源にも注目が注がれる機会も広がり、地元でもそうした機会を活かすべく地道な取り組みが進められている。

こうした現状を踏まえ、本調査は中国山地地域における歴史文化資源を掘り起こし、その活用を図るための課題等を明らかにする。このため本調査においては、アンケート調査により歴史文化資源の活用状況について、その現状把握を行うとともに歴史文化資源を活用した地域振興に関する事例調査等を踏まえて、中国山地地域における歴史文化資源を活用した観光活用のあり方について検討する。

またこれに合わせて中国経済連合会は、中国山地地域の観光町づくり等において多面的に活用できる「中国山地歴史文化回廊」を作成し、関係者に提供する。

第１章　「中国山地歴史文化回廊」の作成

１．編集方針

「中国山地歴史文化回廊」の作成においては、以下のような基本的な考え方の基に編集企画を行った。

①時代区分に沿ってテーマを設定し、各分野の専門家が執筆する。

②中国山地地域に行ってみたくなるような「資源の魅力」を伝える。物語性を重視し、行って確かめることができる資源を主体に紹介する。

③写真を活用して、ビジュアルに構成し、かつ一般の人が読みやすいコンパクトな構成とする。

２．　編集体制

作野広和島根大学教授を編集長とし、中国経済連合会、中国電力株式会社エネルギア総合研究所、公益社団法人中国地方総合研究センター、一般社団法人日本旅行業協会のメンバーによる編集委員会において作成した。

３．「中国山地歴史文化回廊」

冊子の全体構成は以下のとおりである。ページは別冊子のものを示す。

やまなみの旅／神崎　宣武・・・・・・・・・・・・・・・・1
やまなみの景観と自然史／林　正久・・・・・・・・・・・3
中国山地　暮らしの変遷／島津　邦弘・・・・・・・・・5
＜古代＞
中国山地の考古学／古瀬　清秀・・・・・・・・・・・・7
広島県北の神話の世界／三浦　正幸・・・・・・・・・9
古代の山城／三浦　正幸・・・・・・・・・・・・・・・・11
＜中世＞
紀州の高野山の台所を支え続けた大田庄／
林　光輝・・・・・・・・13
毛利氏と吉川氏の史跡を訪ねて／木村　信幸・・・・15
大内文化と社寺建築／三浦　正幸・・・・・・・・・・・17
やまなみ地域の社寺建築／三浦　正幸・・・・・・・・19
＜近世＞
近世の城／三浦　正幸・・・・・・・・・・・・・・・・21
天空の城、備中松山城と山田方谷／野島　透・・・・23
やまなみの伝統的な町並み／迫垣内　裕・・・・・・・25
たたら－中国山地の製鉄文化－／鳥谷　智文・・・・・27
近代化を支えた鉱山町／筒井　一伸・・・・・・・・・29
棚田の景観／高橋　悟・・・・・・・・・・・・・・・・・31
＜現代＞
中国地方のみちづくり－時代とともに暮らしとともに－
／野田　勝・・・・・・33
情緒あふれる「出雲街道勝山」／三村　忠行・・・・・35
中国山地の農林業と観光／平田　克明・・・・・・・・37
やまなみミュージアム探訪／藤原　啓・・・・・・・・39
中国山地をめぐる文学の足跡／高橋　一清・・・・・・41
＜伝統文化＞
やまなみの味紀行／平木　久惠・・・・・・・・・・・・43
やまなみの伝統工芸／神崎　宣武・・・・・・・・・・・45
祭りと伝統行事／神崎　宣武・・・・・・・・・・・・・47
フランスにおけるエコツーリズムから考える／
フレデリック・メイエール・・・・・・49
やまなみの可能性／作野　広和・・・・・・・・・・・・51

第２章　市町からみた歴史文化資源の評価～市町アンケート調査

１．調査方法

(1) 調査対象

日本海・瀬戸内海に面していない中国山地周辺地域の 26 市町村を対象とした。

(注)平成 25 年度（2013）に調査した鳥取県・島根県全域と山口県の日本海沿岸地域および平成 24 年度（2014）に調査した岡山県・広島県・山口県の瀬戸内海沿岸地域は調査対象外とした。

(2) 調査方法

市町村の観光部署宛に郵送でアンケート調査票を配布し、郵送（またはメール）回収とした。

(3) 回収率

18 市町から回収し、回収率は 69.2%である。

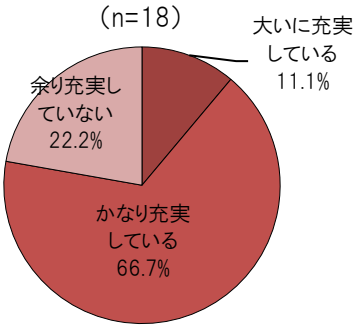
(注)以下の図中のｎが回収数と異なるのは不明・無回答があるためである。また図中の%は項目ごとに四捨五入しているため、合計しても 100%にならない場合がある。

２．中国山地地域の歴史文化資源の実態

問１　貴市町村における歴史文化資源についてお伺いします。 (1) 資源の充実度をどう評価されておられますか

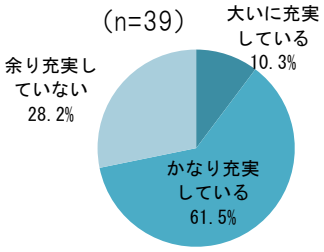
「大いに充実している」が 11%、「かなり充実している」が 67%で、合わせて 78%が肯定的な評価をしている。これは平成 25 年度に実施した山陰・日本海地域を対象とした同種の調査に比べ 6%、平成 24 年度に実施した瀬戸内海地域を対象とした同種の調査に比べ 16%高い水準である。

歴史文化資源の充実度

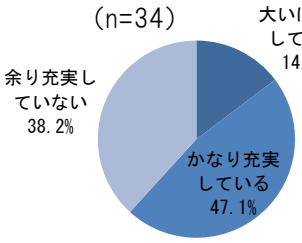


参考：山陰・日本海地域における市町調査（平成２５年度）、瀬戸内海地域における市町調査（平成２４年度）

歴史文化資源の充実度（山陰・日本海地域）



歴史文化資源の充実度（瀬戸内海地域）

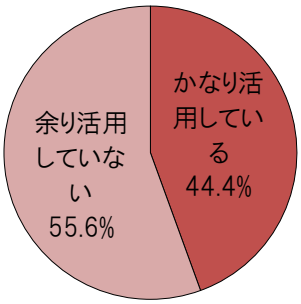


(2) 資源の活用度をどう評価されておられますか。

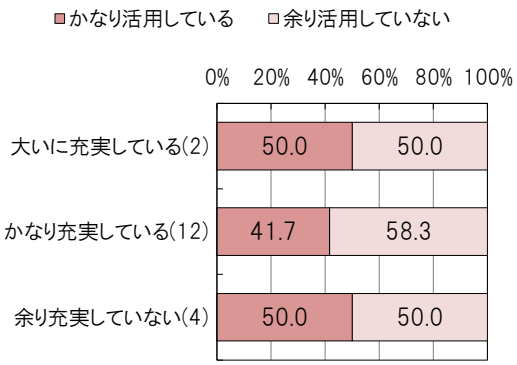
「大いに活用している」が 0%、「かなり活用している」が 44%であった。一方で「余り活用していない」は 56%と過半数であることから、活用度については肯定的評価と否定的評価に分かれているといえる。資源の充実度と活用度とは相関関係が見られず、資源が「大いに充実している」「かなり充実している」「あまり充実していない」の各地域で、「かなり活用している」と「余り活用していない」の評価がほぼ半々となっている。

歴史文化資源の活用度

(n=18)



資源の充実度×資源の活用度



(3) 現在活用されている歴史文化資源、今後更なる活用が期待される歴史文化資源についてお伺いします。具体的にご記入下さい。

現在活用している歴史文化資源として挙げられたものは、時代区分的には古代・中世・近世・近代にわたり多彩なものとなっている。加茂大祭、三次の鵜飼、山王さん祭早駆馬神事など祭事等の文化的資源に加え、鉄道などの近代歴史資源が挙げられ、多様性があることなどが特徴となっている。

また大半の市町村が、資源の掘り起こし、資源磨き、観光商品開発などに取り組んでいる歴史文化資源があると回答している。その内容も現在活用している歴史文化資源同様、時代区分的にも幅広く、バラエティに富んでいる。ここではすでに観光面での活用が進んでいる歴史文化資源とは別の資源が数多く指摘されており、各地での歴史文化資源の掘り起こしと資源磨き活動が展開されていることから、さらに中国山地地域の歴史文化の広がりと深みが加わることが期待される。

市町	観光面での活用が進んでいる歴史文化資源	資源の掘り起こし、資源磨き、観光商品開発などに取り組んでいる歴史文化資源
総社市	鬼ノ城、作山古墳、備中国分寺	一丁丸古墳群、赤米
高梁市	備中松山城、吹屋ふるさと村	広兼邸、旧吹屋小学校
新見市	新見御殿町、備中国新見庄	
赤磐市		倉敷往来
真庭市	勝山町並み保存地区	旧遷喬尋常小学校
美作市	名城跡	古町の街並み、武蔵の里、真木山等山岳観光資源
鏡野町	奥津峡	奥津峡、旧森江家住宅、鍛冶屋谷たたら遺跡、たたら記念館、たたら展示館
久米南町	誕生寺（法然上人の誕生地）、治部邸	
美咲町	棚原ふれあい鉱山公園（鉱山資料館、片上鉄道駅舎、鉄道車輛）、大垪和西棚田	棚原ふれあい鉱山公園（鉱山資料館、片上鉄道駅舎、鉄道車輛）、大垪和西棚田
吉備中央町	加茂大祭、片山邸、主基田	
三次市	三次の鵜飼	銀の道（銀山街道）
庄原市	庄原市三楽荘（東城町）、山王さん祭早駆馬神事（山内町（日吉神社））など	
安芸高田市	毛利氏関連史跡	安芸高田神楽
北広島町	国史跡吉川氏城館跡	広島神楽、ユネスコの無形文化遺産「壬生の花田植」、古保利薬師
世羅町		銀山街道、今高野山
神石高原町	神楽・神祇などの神事	古来からいわれのある石仏や史跡などをパワースポットとしてブラッシュアップ
美祢市	長登銅山	大田・絵堂の戦い等明治維新関係、赤間関街道中筋道

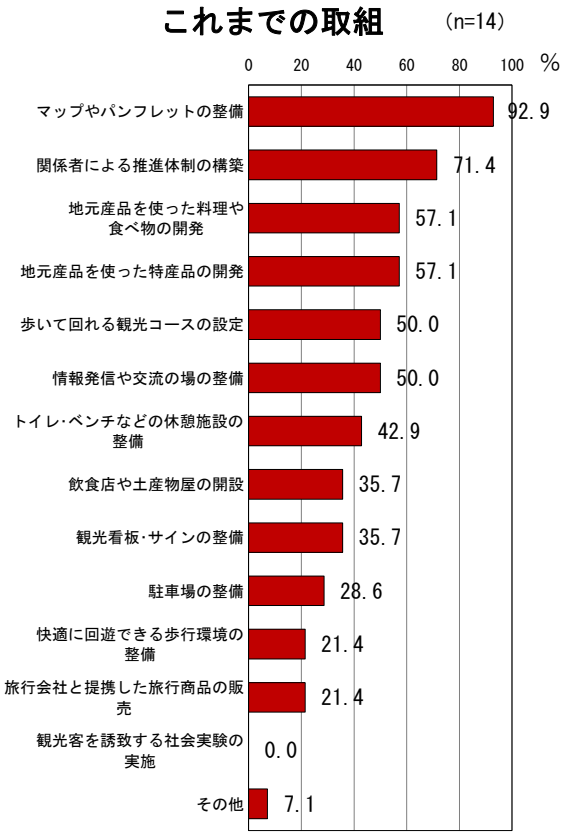
（巻末別図　中国山地地域の歴史文化資源）

２．歴史文化資源を活用した取り組み

問２　「資源の掘り起こし、資源磨き、観光商品開発などに取り組んでいる歴史文化資源」についてお伺いします。これまでどのような取組を行われていますか？また今後はどのような取組を行いたいとお考えですか？

これまでの取り組みでは、「マップやパンフレットの整備」が最も多く、情報発信に力点が置かれてきたことがわかる。さらに「関係者による推進体制の構築」「地元産品を使った料理や食べ物の開発」が続いている。

今後行いたい取り組みとしては、「旅行会社と連携した旅行商品の販売」「快適に回遊できる歩行環境の整備」「観光看板･サインの整備」等の商品開発や現地での環境整備が上位となっている。14 の選択肢のうち 12 項目で 30%を超える回答があることから、今後、取り組むべき課題が多岐にわたることが認識されている。



（注）複数回答

（注）複数回答

３．歴史文化資源を活用した地域連携

問４　貴市町村の歴史文化資源を活用して、どの地域のどんな資源と連携したいとお考えでしょうか？また、観光コースとしてはどんなコースが望ましいとお考えですか？

(1) 期待される観光コース

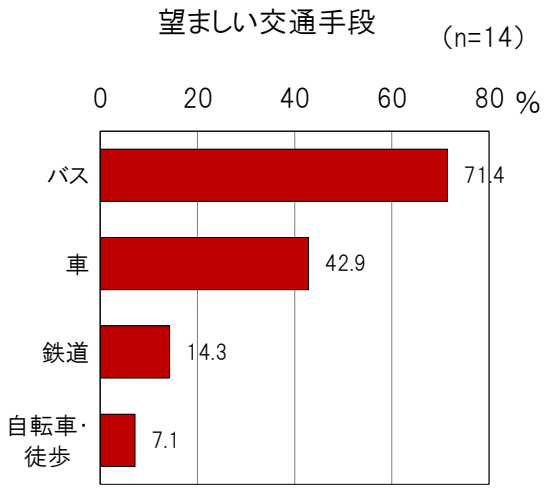
期待される観光コースとしては、テーマに基づくコースと近隣資源をつなぐコースのタイプとがある。同一テーマに基づく観光コースとしては、たたらをはじめとして、毛利氏、街道、妖怪、明治維新など中国山地を特徴付ける歴史性や物語性のあるテーマが意識されていることがわかる。中国山地の歴史文化資源を活用する上で、今後はこのような中国山地固有のテーマを活かした連携活動の展開が見込まれる。

タイプ	テーマ	望ましいと考える観光コース
テーマに基づく観光コース	町並み	倉敷～備中松山城、倉敷～吹屋ふるさと村、出雲～備中松山城、出雲～吹屋ふるさと村
	街道沿線をたどる	倉敷往来沿線市町、出雲往来沿線市町、石見銀山街道沿線市町
	たたら	岡山県真庭市～岡山県鏡野町、鳥取県日野町～岡山県鏡野町
	妖怪物語の街を結ぶ	山陰～三次～四国（徳島）
	毛利氏ゆかりの地を訪ねる	安芸高田市～三原（小早川氏）～岩国（吉川氏）～萩～防府
	石見銀山街道	
	明治維新ゆかりの地を巡る	萩市～美祢市～山口市～防府市
近隣資源をつないだ観光コース	－	出雲～松江～境港
		美作圏域の寺社仏閣や歴史文化財
		若桜町～津山市～美咲町～美作市（湯郷温泉）の文化財、鉄道施設、温泉施設
		帝釈峡国定公園周辺の文化財、博物館、資料館
		北広島町内の温泉、農家民宿と神楽鑑賞

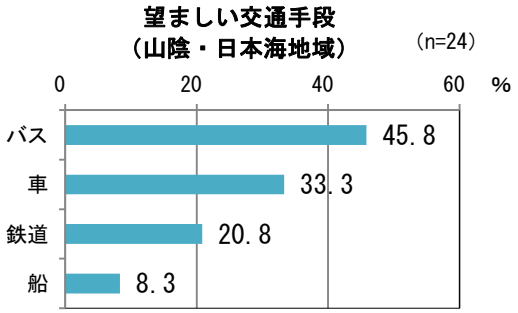
（巻末別図　望ましい広域テーマルート）

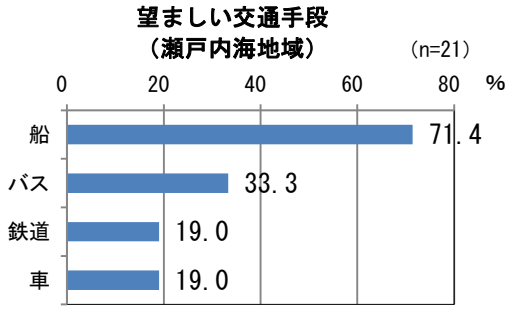
(2) 望ましい交通手段

前記の望ましい観光コースにおける望ましい交通手段への回答としては、「バス」が 71%と最も多く、車が第２位となっている。平成 25 年度に実施した山陰・日本海を対象とした同種調査でも第１位、第２位は同様の傾向を示したが、平成 24 年度に実施した瀬戸内海を対象とした同種調査では「船」を活用する意向が強かった。その背景には山陰同様公共交通サービスが比較的弱い中国山地の場合は、バスや車でつなぐというのが現実的な交通手段として意識されていることが特徴となっている。



参考：山陰・日本海地域における市町調査（H2５年度）、瀬戸内海地域における市町調査（H24 年度）





第3章　歴史文化資源を活用した地域振興に関する事例調査

１．調査の方法

(1) 調査目的・項目

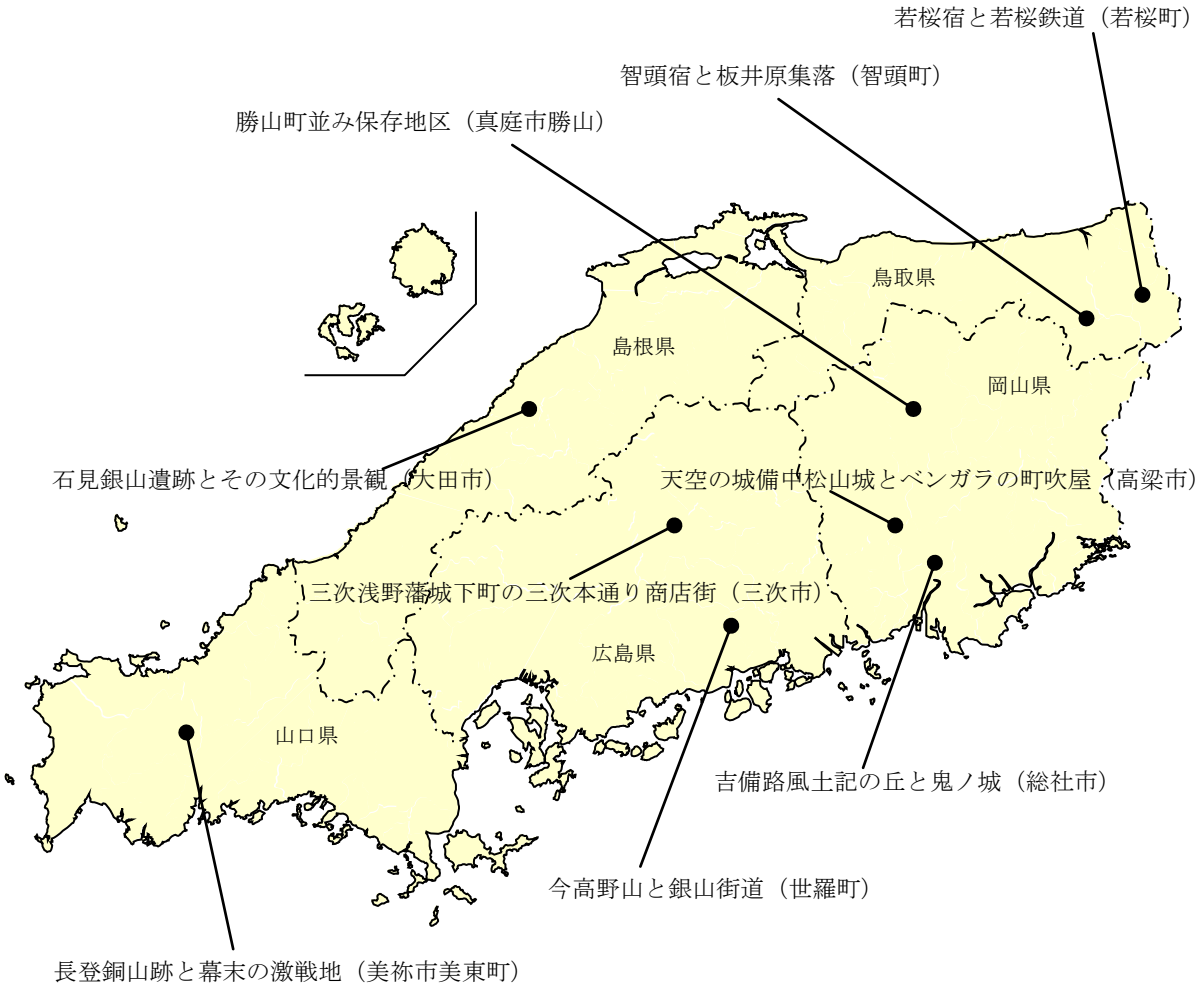
中国山地地域には、有史以前の太古の歴史を語る資源から近世に至るまでの歴史的資源が豊富に存在する。それらは歴史的価値を有する半面、知名度はさほど高くなく、最近まで埋もれていたものも多かった。

近年、地元でもそうしたものに対して価値を見いだす動きが高まっており、これまで無名に近かったものを掘り起こし磨きをかけることによって、自らが暮らしている地域には価値ある歴史文化資源があったことを再認識し、地域に誇りをもつとともに、それを観光資源として活かそうとする動きがみられる。

このような活動を行っている地域の中から、歴史文化資源の掘り起こしや資源磨きによる観光振興の実態とあり方を探るため、取り組み内容、効果、課題等を把握することを目的として、事例調査を実施した。

(2) 調査対象地域

調査対象は、以下の９地域とした。



２．事例調査結果

(1) 若桜宿と若桜鉄道（鳥取県八頭郡若桜町）

（資源の概要）

鳥取県内で最東端に位置し、中国地方第２位の標高を誇る氷ノ山（1,510m）を境にして兵庫県と接する若桜町は、江戸期以前から城下町として栄え、江戸期には因幡から播磨を経て上方へ抜ける脇街道の宿場町「若桜宿」としても知られていた。だが明治期に２度の大火に見舞われたことから、当時の住民によって火災に対応した町並み整備計画が実施され、通りの拡幅、水路の設置、「仮屋」と呼ばれる通路の役割も果たす軒先の設置など、当時としては先端的な町づくりがなされ、この家並みが現在の宿場町の象徴となっている。

またこの町には昭和以降、町の発展を支えた国鉄「若桜線」が第３セクター「若桜鉄道」となって運行されている。同鉄道は現役路線ながらＳＬ体験運転などのイベント運行などで知られるとともに、沿線のさまざまな施設が登録有形文化財になっており、終着駅である若桜駅には休日を中心に鉄道ファンが数多く訪れている。

（主な取り組み）

町では若桜宿の町並みと周辺を昭和の古きよき風情漂うにぎわいのある「若桜宿」にしようと取り組みを進めている。その一環として明治の町並み整備の面影を伝える古い民家「木島家住宅」を地元商工会が休憩所・食事処「かりや」に改修し、町歩きの拠点としている。

近年、若桜に観光客が数多く訪れるようになったきっかけには、若桜鉄道にＳＬが入ってきたことが大きな要因となっている。平成20年（2008）に若桜鉄道の関連施設が近代化遺産として登録有形文化財になったほか、平成26年（2014）年には、「木島家住宅」も町並みを形成する貴重な町家として国の登録有形文化財となるなど、評価の高い歴史資源が観光客を引き付けている。若桜鉄道も観光客への情報発信には熱心であり、観光協会と共にＰＲの先頭に立っている。

若桜町も情報発信、町づくり推進体制整備、特産品開発、観光施設整備、観光コース設定、旅行商品開発など様々な取り組みを続けている。

町歩きのサポート役となるガイドクラブは、７年前に始まった地元の歴史を学ぶ集まりが発展して発足した。メンバーは現在、明治の住民による日本最初の都市計画といわれる智頭宿の町並みづくりを「カリヤと川のあるくらし」として伝える。また青年会議所も毎年小学校５、６年生を中心とする地域の子どもを募集し、子どもガイドとして養成する活動を続けており、観光客からも好評を得ている。この活動には将来の後継者育成という意味もあるが、地域の歴史を学ぶ中から地域への愛着を醸成する意味合いが強いことが特徴である。

通路の機能を備えた仮屋が続く若桜宿の町並み

若桜鉄道若桜駅構内に停車するＳＬと転車台、給水塔

（成果・課題）

若桜町の観光の２本柱である「若桜宿」と「若桜鉄道」について、現在の観光施策では、前者をより前面に押し出した観光誘致を図りたい意向である。しかし近年話題となり人気が高まってきているＳＬを中心とした若桜鉄道関連への誘客も重要である。若桜駅は若桜宿の中に位置しているため、鉄道目的で訪れた人に宿場町の風情を味わってもらうことが可能である。実際そうした観光客も多く、ガイド団体はＳＬ導入当初の平成19年（2007）に活動が最も盛り上がったと評価している。

鉄道を目的として訪れる人と、町並みを目的として訪れる人に、若干の行動の違いがあるとはいえ、どちらも歴史文化資源ととらえれば、一体として案内が可能である。観光協会のサイトでもそれぞれを観光スポットとして紹介しているので、町並みと街道・城下町の歴史の案内に強みを持つガイドが、鉄道ファンへも訴求できる知識を得るとともに、ガイドメニューをそろえることが課題である。その点では鉄道への関心も高いと思われる子どもガイドは有望であり、彼らが地域の歴史と共に鉄道の細かい特徴なども、観光客に伝えることができれば、彼らを通じて大人のガイドも新たなガイドメニューを獲得できる可能性もある。

また組織的な連携の面では、情報発信に関しては主に観光協会と若桜鉄道がこの地域の観光情報を発信している。ただ、前者は広く浅く、後者は狭く深くの傾向があるため、両者が連携し、うまくブレンドした情報発信を行うことが課題である。

観光客の受け入れ環境として、宿内に休憩所、表示板などは整っている。しかし、駐車場は道の駅を利用しており、宿から少し離れている。また、宿内の街道が生活道路となり、散策にあたり車の往来に注意が必要である。加えて宿泊施設はなく、食事できるところは少ない。さらなる受け入れ環境の向上を図るとともに、宿泊の不便さでは同じ悩みを持つ隣の智頭町などと連携して、相互利用できる民泊システムの構築など、地元への経済効果を高めていくことが課題となっている。

(2) 智頭宿と板井原集落（鳥取県八頭郡智頭町）

（資源の概要）

智頭町は古くから因幡と大坂とを結ぶ智頭往来（因幡街道）、岡山とを結ぶ備前街道の二つの街道が通る「智頭宿」があり、参勤交代をはじめとして、人と物の行きかう宿場町であった。この町には江戸期からの大庄屋で明治期の実業家であった石谷家が建て、現在は国指定重要文化財の「石谷家住宅」や国登録有形文化財の「旧塩屋出店主屋他３棟」などがあり、往時の繁栄ぶりを示す歴史的建造物が残っている。また中心地から離れた山間には、日本の原風景と評され、昭和30年代の山村風景をそのまま保っている「板井原集落」があり、近年注目されている。平成16年（2004）、鳥取県指定の伝統的建造物群保存地区（伝建）に選定されている。

（主な取り組み）

智頭町での歴史文化資源の掘り起こしや活用は、観光カリスマでもある現町長が主体となり、地域住民とともにアイデアを探りながら歴史文化を活かした町づくり構想を策定し、平成10年（1998）から継続して進められている。当時は歴史文化資源を活用する雰囲気は皆無で、町から重要伝統的建造物群保存地区（以下重伝建）を目指してはどうかとする案を出したものの、その必要はないとする意見も根強かった。

石谷家住宅の外観

石谷家住宅の内部

「石谷家住宅」は展示室を整備した後、平成13年（2001）年に公開され、著名アーティストによる作品展やコンサートを定期的に開催している。国もその価値を認め、平成20年（2008）には庭園が登録記念物に、平成21年（2009）には建物と敷地が重要文化財に指定された。近年智頭宿では町なかをレトロに彩る新たな祭り「智頭宿ハイカラ市」も開催されている。石谷家住宅は現在年間３万人程度の来館者が訪れる施設となっている。

また周辺の他の古い建物も町が買い取り公開してきており、住民が主体となっている智頭宿町づくり協議会が、観光ガイドなどを行っている。

一方昔の暮らしとその風景が偲ばれる板井原集落は、定住者がほとんどいなくなった集落となったが、専門家により集落景観の価値が大きく評価されたことから、町が保存活用に取り組むこととし、地区全戸で保存協議会が立ち上

板井原集落

げられ、集落の保存再生と地域の活性化への検討が行われている。

智頭町の歴史文化資源の活用の特徴は、取り組みの始まりが町主導であったことである。そして町長が打ち出した地元の歴史文化や地域環境を活かすアイデアと町主導による住民参加の仕組みづくりがうまく機能したことから、効果的にその活用が進み、智頭宿町づくり協議会が組織され、住民自ら資源を活かした町づくりに取り組むようになった。

（成果・課題）

歴史文化を活かす取り組みの成果として最も大きかったことは、他地域から石谷家住宅を観に人々が訪れるようになったことから、それまで地元の歴史や文化財に無関心だった住民が関心をもち、さらには積極的にその保存活用に関わるまでになったことであった。訪れる人を意識することで、地区を美しく保つ意識も高まり、ボランティアでの清掃活動も行われるようになり、その活動自体が他地域や韓国のテレビ局も取材に訪れるなど、海外からも注目されるようになった。

また観光客が快適に周遊するための駐車場（特に大型バス用）やトイレの整備、案内表示設置、観光ガイドの組織化なども進み、智頭宿は観光地としての評価を受けるまでになった。ただ、観光の中心となる石谷家住宅は年間３万人の訪問があるものの、周辺に団体受け入れ可能な宿泊施設や飲食店がないことや、個人で訪れる人は概ね自動車を使うため、観光客が過ごす時間が短く滞在地となっていない。また板井原地区に通じる道は極端に狭く、初めての人には自動車でも行きにくいことも周遊するうえでの課題となっている。

宿泊施設や飲食店などのインフラ投資は、観光客数が増えて初めて促進されるため、今後、ＰＲをより積極的に行うとともに、智頭町だけでなく周辺地域の観光地と連携して歴史文化資源を巡るルートを作ることなど、地元への経済的効果なども高めていくことが課題である。現在、智頭往来（因幡街道）沿線の岡山県西粟倉村、同美作市大原地区、兵庫県佐用町平福地区と智頭町が民間で「三宿場協議会」を構成して連携を模索している。これを行政連携のレベルに高めることで、広域周遊圏を形成する観光振興活動とすることが課題となっている。

(3) 石見銀山遺跡とその文化的景観（島根県大田市）

（資源の概要）

大田市は島根県の石見東部地域に位置し東は出雲市、西は江津市に接している。この地域は太古の歴史に触れることができる資源を数多く擁しており、『出雲国風土記』の国引き神話にも登場する三瓶山（1,126m）は過去の噴火によって、周辺地域に地質的影響を及ぼしてきた。その一端に触れることができるものとして、三瓶小豆原埋没林、石見銀山がある。

石見銀山はもともと三瓶山の噴火により地中から噴き出したマグマによって形成された広範囲にわたる岩塊の一部であったが、その中に自然銀が含まれていたため、室町時代に本格的に採掘が始まり、掘り出された銀は日本経済のみならず世界経済にも多大な影響を及ぼした。近代には銀が産出しなくなり戦前に閉山となったが、その遺構は歴史的な価値を有し、周辺地域の建造物と共に文化財に指定され保護されてきた。そして平成19年（2007）には世界に影響を与え、自然と調和した文化的景観を形作っている点が評価され「石見銀山遺跡とその文化的景観」として世界遺産登録された。その範囲には銀鉱山跡と鉱山町、銀を運んだ石見銀山街道、銀を積み出した港と港町に及ぶ。

（主な取り組み）

石見銀山がある大森地区では、昭和40年代以降地元行政や国などにより銀山遺構や歴史的建造物が文化財に指定され保護されてきた。また町並みについても大森地区は昭和60年代に、温泉津地区（銀の積出港だった港町）は平成16年（2004）に、重伝建に選定された（大森地区は平成19年、温泉津地区は平成21年に選定区域を拡大）。

世界遺産登録を目指していた平成16年（2004）ごろから石見銀山遺跡の保全活用を議論する官民一体の協議が始まり、世界遺産登録による経済活性化への期待の一方で、観光地化による住民生活に対する影響への不安も議論された。

美装化された自動販売機

歴史的な町並み景観から銀山を望む

こうした中、住民を主体とする石見銀山の保全と維持に向けた活動が広まり、大森地区では、大型自動販売機に周りの風景に合わせた木製の覆いを設置するなど、通りの景観を調和したものにする配慮もなされていった。

行政もそうした動きに足並みをそろえ、地区住民の日常生活を妨げることなく、観光客も堪能できる観光地化への模索を進めて行った。世界遺産登録後は銀山に至る道への観光車両の進入を規制し、公共交通を利用する「パークアンドライド」、もしくは徒歩とし、環境保全に努めることとしたが、それは町内への車の進入による生活環境悪化を防ぐための効果もあった。

（成果・課題）

石見銀山では世界遺産登録前の観光客数は年間30万人前後であったが、登録の平成19年（2007）には71万人と倍増、翌平成20年（2008）には81万人とピークになった。その後はブームが一段落し、現在では40～50万人台半ばとなっている。こうした減少について、行政はピーク時のような混雑が続けば、環境にも負荷がかかり、日常生活にも影響を及ぼす恐れもあるため、観光の中心となる大森地区の受入れ能力を前提とすれば、現状が適当であると判断している。環境保全と一体となった観光地化を進めてきた大田市は、現状プラスアルファの入込みを目指したうえで、観光地としての質を高める施策に取り組んでいる。

ガイドの説明を頼まない観光客の多くは歴史文化資源の価値を十分理解できないことからマイナスイメージの発信者になり、ひいては観光客数減少の遠因となる恐れがある。その一方で、ガイドに説明を頼んだほとんどの人はその価値を認めている。このため市は観光ガイドの役割を重視し、ガイドの育成支援を行うとともに、ガイド料の補助も行った。銀山だけでなく「石見銀山とその文化的景観」の意味と価値を一体的に伝えることが今後とも課題である。

最近、台湾や韓国からの観光客が増加しているが、有料での外国人向けガイドには外国語専門の案内資格が必要であるため、その対応が課題となっている。

また、地元は何よりも訪れた人に宿泊滞在してもらうことで経済的効果を得たいが、他の資源にスポットが当たり切らず、銀山だけ観て帰ったり、他地域に移動して宿泊する傾向が高い。団体客受け入れ可能な宿泊施設が市内にないことが要因である。団体客等の宿泊需要に市内だけでは添えない現状を打破するためにも、近隣地域と連携し、一体化して宿泊需要への対応を図ることが課題である。さらに今後、中国横断自動車道尾道松江線の全線開通により、山陽側を経由してより遠方から訪れる観光客の増加も期待されることから、石見銀山のみならず市内全域を対象とした歴史文化資源の情報発信をきめ細かく行うことが課題である。

(4) 吉備路風土記の丘と鬼ノ城（岡山県総社市）

（資源の概要）

岡山県の内陸部に位置する総社市は、古代には吉備国の中心地として栄え、古墳、国分寺、古代山陽道、鉄鉱石を使った製鉄（たたら製鉄とは異なる）では日本で最古の遺跡など古代からの遺跡が数多く残されている。また遺構を基に復元された山城である鬼ノ城や、活用が図られつつある一丁坦（いっちょうぐろ）古墳群も新たな歴史資源として注目されている。

このように古来より文化的にも栄え、古代を中心とした歴史遺産が狭い平野部に凝縮されていることに加え、近郊には室町時代の画僧雪舟が修行した宝福寺など後代の歴史的観光資源もあり、さまざまな時代に関心を向けることができる地域である。

（主な取り組み）

昭和40年代に、文化庁の「風土記の丘設置構想」に基づき、遺跡・歴史資料の保存・活用を目的として、野外博物館・公園「風土記の丘」が設置された。その際に隣接する岡山市の造山古墳（大きさで全国第４位）、総社市の作山古墳（同第10位）と備中国分寺および周辺の古墳などを一体として、「吉備路風土記の丘」に指定された。そしてサイクリングロードなどが整備され、観光資源として活用され、古墳観光に訪れる人も増加した。さらに平成以降、総社平野の北側の山にある鬼ノ城跡が発掘調査されるとともに、遺構が復元整備された。全国には古代山城といわれる飛鳥時代の城は23しかないが、その中でも最も発掘調査と復元が進んだ山城として学術的にも注目されるとともに、自然を活かした歴史公園として非常に多くの人が訪れている。

総社市、岡山市、倉敷市にまたがったこの周辺地域は「吉備路」という名称で知られており、この３市は吉備路観光連絡協議会を結成して、観光パンフレットなどを共同で作成し、情報発信を行っている。また総社市は平成20年（2008）に市内外の有識者20名で構成する市内観光を考える会「総社観光プロジェクト」を発足させ、平成22年度（2010）に観光プロジェクト報告書をまとめ24の提言を行った。以降総社市ではこれに基づき、「まちなみデザイン統一化事業」（テーマカラーの茶色を使って商店街をのれんで飾り付け）、「総社観光大学」（講義や食べて・見て・体験するプログラムを楽しみながら、修了生が総社ファンを増やす観光の伝道師となることを期待）などを継続して取り組んでいる。

復元された鬼ノ城西門

赤い穂先が特徴的な赤米を植える田圃

一方市民が主体となっている活動では、平成６年（1994）から活動を続ける「吉備路ボランティア観光ガイド協会」は、これまで個人・団体、営利・非営利を問わず観光客に無料で観光ガイドを実施している。普段は総社市内を中心として活動しているが、隣接２市も含め観光客の依頼に応じて吉備路全域のガイドを行うとともに、隣接２市のガイド組織と連絡を密にし、ガイドの相互乗り入れがで

きる体制づくりも行っている。このほか有志の活動として、古代米である「赤米」の栽培に取り組み、地域の特産物として商品開発を行っている事例や、鉄鉱石を用いる古来の製鉄製法の再現に取り組む事例もある。

そうした中で４年前に発見された県南最大最古の前方後方墳を擁する一丁坦古墳群は、地元住民が保存協議会を立ち上げ、腐葉土の上を歩いて散策しながら歴史を楽しめる公園にしようと、雑木や雑草の刈り取り、遊歩道や看板の設置、地区の歴史パンフレット作成、ネットでの情報発信、勉強会、講演会、清掃活動と活発な活動を行っている。運営や発信を地元が行う住民参加型観光資源開発のよい例であり、文化庁関係者からも21世紀型の遺跡整備と評価されている。

（成果・課題）

備中国分寺周辺の観光客数は年間 50 万人台で以前からさほど急増、急減はない状況である。その一方徐々に増加してきているのが鬼ノ城で、大型バスが通れない山上の立地にもかかわらず、日本城郭協会により日本 100 名城のひとつとして定められた（古代の城として福岡の大野城と本城のみ）ことや近年の山城ブームもあり、年間５万人以上が訪れ、自家用車で他県から訪れる人も多い。

史跡に恵まれかねてより観光客にも人気の高い地域であるが、住民有志が中心となり、さまざまな角度から地元の歴史資源を掘り起こす活動が盛んであり、それが観光に結びついている点が特筆される。その背景のひとつには自分たちの郷土の歴史を学んで磨きをかけることによって、その良さを自ら認識しつつ、次の世代が地元に残ったり、戻ってきたくなる誇れるものとして受け継ぎたいとの思いがある。それがひいては地域の存続につながっていくとの認識でもある。そうした自らの地域に対する想いから始めている活動が観光客にも評価され、観光地として支持されている点が、持続性を持った活動につながっている。

この吉備路地域３市では、行政も住民も互いの垣根を低くし、歴史文化に関しては連携と相互乗り入れに寛容な風土ができあがっていることが、地域全体のブランド価値を高めている。民間の活動を行政が学術面で支える枠組みもできているが、行政は民間の積極的な活動を資金的にも支援するとともに、情報発信をさらに行って、そうした住民の活動を対外的に紹介する役割が一層求められる。また他地域から訪れる観光客の利便性を高める上でも、観光インフラ整備は継続することが求められ、特に宿泊に関しては、吉備路地域では限られている宿泊施設のネットワーク作りを行政が支援することが課題となる。

(5) 天空の城備中松山城とベンガラの町吹屋（岡山県高梁市）

（資源の概要）

岡山県の吉備高原の中央部に位置する高梁市は、江戸時代に備中松山藩と成羽藩によって城下町や陣屋町が形成され繁栄した。現在両地域には、①備中松山城を中心とした城下町の町並みと、②吹屋のベンガラの町並みという趣の異なる歴史資源が受け継がれている。

備中松山城は標高430mの臥牛山頂上付近に位置する国の重要文化財で、天守を持つ城では国内で最も高い場所にある。また城の麓に広がる高梁の町並みはかつての面影を色濃く残す、堀、武家屋敷、商家などが残されており、観光客には軽登山の雰囲気を味わいながらの城探訪と町並み散策の両方が楽しめる点から人気が高い。

吹屋は江戸時代に吹屋銅山を中心に発展し、幕末から明治にかけて硫化鉄鉱石を原料とする赤色顔料ベンガラの生産地として繁栄した。この地域の中心部は現在「吹屋ふるさと村」として町並みの保存改修が行われ、重伝建にも指定されている。往時の雰囲気を味わえる町並みづくりが進められ、周辺地域にある銅山坑道跡の笹畝坑道、大庄屋邸宅であった旧広兼邸、廃校前には日本最古の現役の木造校舎だった旧吹屋小学校とともに、一帯が観光客に人気のスポットとなっている。

（主な取り組み）

高梁地区（備中松山城および城下町）を訪れる観光客数のうち、備中松山城の入城者数は、平成25年（2013）に５万人を超え、翌26年（2014）には1.5倍の7.5万人が見込まれている。その背景として、「天空の城」としてマスメディアで取り上げられる機会の多い兵庫県朝来市の竹田城が雲海ブームを誘引しており、同じく雲海に浮かぶ備中松山城を訪れる人が増えている点が大きい。

吹屋地区は昭和52年（1977）年に重伝建地区となったが、翌年設立された吹屋町並保存会が行政と連携して取組むことにより、古民家改修や町並保存も含む景観の維持が図られている。また吹屋地区を含む周辺地域の有志による交流組織「高梁市中央高原三地域懇談会」は、観光誘客に資するため、案内看板設置や特産品開発の研究などを行っている。

天守が現存する山城では日本一高いところにある備中松山城

ベンガラの赤が町並みに映える吹屋ふるさと村

高梁市は、平成24年（2012）、「交流人口100万人」をスローガンに掲げ、スポーツ、町づくり、イベント、観光により交流人口増に取組んできた。また、平成25年２月、観光振興を進めるためにどのようなアクションを起こすべきか、行政、各観光協会、民間事業者（観光に関わるホテル、交通機関等）、町づくり団体がどう行動すべきかをまとめた「観光戦略アクションプラン」を策定し、それに沿って歴史文化資源を観光に活かす方策を探ってきた。

一方、同市は、平成22年策定の「高梁市歴史的風致維持向上計画」で、高梁地区と吹屋地区を重点

区域に設定した。この計画では、文化と風景を一体で守ることに主眼が置かれ、従来、文化財、建物、民俗芸能など、個別に保存活動が行われていたものが一体として扱われることとなった。国も同様の方針であり、高梁市には追い風となっている。

高梁地区と吹屋地区ではボランティアガイドの果たす役割も大きく、先述の「観光戦略アクションプラン」ではガイド組織の強化も重要課題としており、ガイドの質向上と若手人材発掘のため、実際のガイド状況をビデオ化し教材とするなどの施策に取り組んでいる。

（成果・課題）

備中松山城は天空の山城として人気が高まり訪れる人が急増しているが、大型バスの乗り入れが難しく、地元の中型バスに乗り換えなければならない。中型バスの駐車場から城まではちょっとした標高差を歩くため体力が必要である。またガイド需要の高まりから、ガイド予約がキャンセル待ちとなる状況も発生している。さらに、ガイドも高齢化しており、体力のある新たな人材を養成することが課題となっている。

吹屋地区では現在建物内への入場に制約のある旧吹屋小学校について、歴史的風致維持向上計画では保存修理が記されているものの、その活用方法は検討中である。かつての小学校として見学できるゾーンと吹屋の産業を展示する資料館ゾーンとに分ける案などが検討されており、今後の改修と活用が期待される。

両地域を通じて、いろいろな種類の案内看板がバラバラに立っており、来訪者に分かりにくい状況にある。高梁市は、市内全域を統一看板にすべく調査を行っており、今後の掲示に向けた企画、デザインが早期に実施されることに加えて、インバウンドに対応した外国語表記も課題となっている。

また、公共交通機関を利用する観光客に、離れた両地域を１日で観光する手段としてのレトロなボンネットバスや観光タクシーなどをより広く情報発信し、両観光拠点の連携を高めること、さらには域内に経済的効果をもたらすために、食事処の整備や土産物開発を進めることも課題である。

(6) 勝山町並み保存地区（岡山県真庭市勝山）

（資源の概要）

岡山の北中部に位置し、中国山地の一部である蒜山高原など高原地帯を有する真庭市は、県内でも有数の面積を占める。旧９町村が合併した真庭市はそれぞれ特徴的な観光資源を有しており、訪れる観光客の層も地域ごとに異なっている。

その中で歴史文化の観点から注目されているのが勝山の町並み保存地区である。古くは出雲街道の要衝として繁栄し、土蔵はもちろん白壁や格子窓の古い町並みが残り、石畳と暖簾で飾られた商店や民家の軒先が続く趣ある通りが観光客を引き付けている。こうした風情や住み心地のよさは、他地域から移り住んで店舗を構える人の増加にもつながっており、通りには空き店舗をリニューアルして若い人が経営するおしゃれなショップも並び、町並みに溶け込んでいる。

（主な取り組み）

昭和60年（1985）年から、岡山県の町並み保存事業で瓦や壁が整備された。平成８年（1996）から店舗などの軒先を暖簾で飾る活動が始まり、当時の町も補助（４～５万円のうち半額程度）をした。暖簾の大半は地元在住の草木染作家が手掛けており、暖簾への補助は町村合併後の新市にも引き継がれ、更新される暖簾も補助対象としている。この風情ある町並みが評価され、平成16年（2004）に19万人だった観光客数が年々増加するとともに、暖簾を通じて人々のコミュニケーションもよくなり、住民の町づくりへの参加意識も高まっている。

こうした活動を主導したのは地元有志からなる「かつやま町並み保存事業を応援する会」であり、通りの一角には同会によって無料休憩所なども設置されている。同会は積極的に市に対して町づくりの提言を行っており、市は町づくりの受け皿として積極的に動く住民団体を補助金・助成金によって支援することを基本としている。同会はその後町づくりＮＰＯ組織を立ち上げ、市によって地区内に設置された勝山文化往来館「ひしお」の運営も受託している。ただし同会は観光客を増やすためではなく住民に住みよい町づくりを行うのが活動の主眼であり、それを評価して観光客が訪れてくれればよいとの意向である。

町に関する情報発信は勝山観光協会や真庭観光連盟が行うほか、この町に出店した若い人たちがそれぞれ頻繁に行っており、新たな内容の情報をいち早く伝える役割を果たしている。

また観光客を案内するガイド組織は勝山観光協会と連携しており、協会が受付役やガイド料の配分を担っている。

軒先に飾られた暖簾

酒屋と酒蔵に挟まれた石畳の出雲街道

町並み整備も暖簾で通りを飾る活動も新しい動きだが、観光客から出雲街道と城下町という歴史的

な視点で評価されることもあり、応援する会の参加者も、勝山の歴史を知りたいとの思いから、町並みを案内するガイド組織のメンバーと一緒に歴史研究会を開催している。

（成果・課題）

住民主導により歴史文化の掘り起こしと磨き上げが成功した顕著な事例である。この活動において、行政はあくまでサポート役に徹している点が特徴的であるが、これは、行政の助成金・補助金を使っての町づくりに対する関係者の反省がある。旧町時代の県の町並み保存事業では、古くなり補修の必要な建物を修繕する場合、瓦などは規定のものを使わなければならず、なまこ壁などにも助成が行われたため、さまざまな色合いだった本来の町並みが再現されず、きれいにはなったものの「味」のない町並みになってしまった。この点を活動の関係者は失敗だったと評しており、町並みづくりの中身を吟味して助成すべきであると行政側に提言している。この反省を踏まえ、使われなくなった古い瓦を保存区外の建物に使った景観の再現、暖簾で通りを飾る活動が始まった。

暖簾を飾ることにより少しでも画一性を壊すこと、風景に映えるように暖簾の柄を自らが選択することで、歴史的景観として評価されるほどの町並みに変えていった。現在、勝山町並み保存地区は観光客が大勢訪れる観光地となり、他地域から移り住んで新たに商売を始めたいと思われる町になったが、画一的な建物修繕だけで終わらせていたならば、単なるきれいな町となり、ここまで評価されることはなかったと考えられている。

「かつやま町並み保存事業を応援する会」にとっての課題は空き店舗利用者の選別である。これまで他地域からの出店を無審査で認めていたが、今後は、町に必要かどうかの観点から利用者を選別しようと考えている。

ガイド組織も活動団体の歴史研究会に参加するなど、組織的な交流も行われているが、こうした関係づくりを市内他地区の観光拠点を有するガイド組織、活動団体にも広げ、広域的な連携を構築することが課題である。

(7) 三次浅野藩城下町の三次本通り商店街（広島県三次市）

（資源の概要）

中国地方のほぼ中央に位置し、古来より山陽と山陰とを結ぶ陸運（雲石街道）、水運（江の川）の要衝であった三次市は、市内に見られる古墳群の存在からも、古代から開けた地域であった。その中にあって市内を流れる３本の川の合流点に位置する三次町は、江戸期には三次浅野藩の城下町であり、町内には往時をしのばせる寺社や文化財などの豊富な歴史資源が残っている。

豊富な歴史的資源の中で、260年前の江戸期に実在した武士稲生武太夫の妖怪との遭遇体験について記された絵巻物『稲生物怪録』が再評価されている。江戸時代後期の国学者平田篤胤も『稲生物怪録』に注目したが、その後長く忘れられてきた。『稲生物怪録』は16歳の平太郎（後の武太夫）が肝試しに、たたり岩の前で「百物語」をしたことから、その後30日間、連夜妖怪が家に押し寄せて怖がらせようとするが、平太郎は怖がらず、妖怪が負けを認めて去っていくという内容である。この物語が持つ民俗的な価値の評価が高く、地域の歴史的文化資源として重要視されている。

（主な取り組み）

江戸期から続く商店が600mにわたって軒を並べる三次本通り商店街には、明治・大正期に建てられた家屋も多く残っており、歴史の趣を感じさせる地域になっている。平成19年（2007）、石畳舗装化、灯篭風の街路灯の設置、市の補助による建物の改修により、歴史的景観を保った趣のある町並みがよみがえった。

またその一角にあった三次市歴史民俗資料館を改築し、平成25年（2013）、三次出身の人形作家辻村寿三郎の作品などを常設展示する「辻村寿三郎人形館」がオープンした。

平成11年（1999）、地元有志がそれまで埋もれていた『稲生物怪録』を再評価し、「もののけ」で町おこしをしようとする活動が始まり、「物怪プロジェクト三次」が立ち上がった。商店街や商工会議所もこの活動に協力・参加し、平成17年（2004）から「三次物怪まつり」が開催されている。また、商店街に物怪にまつわる標識や照明を設置している。

和風の家並みが目を引く
三次本通り商店街の一角

『稲生物怪録』の一節を浮
かび上がらせる灯篭型照明

公衆トイレの性別も妖怪で表示

（成果・課題）

三次町内で取り組まれている商店街を中心とした町づくりと町おこしはいずれも地元自らが主体的に取り組みを始めたものである。市はこうした民間の動きを支援することが重要と位置づけ、歴史

文化資源の展示施設の整備を進めてきた。三次市内でも三次町はいち早く歴史文化を味わえる拠点化が進んでいることから、市では今後ＪＲ三江線を起点として三次の街全体を「まるごと博物館」と位置づける考えである。こうした取り組みは、他地域からも注目を集めている。

日本画家・奥田元宋と人形作家・奥田小由女の夫婦の名を冠した「奥田元宋・小由女美術館」、「辻村寿三郎人形館」が美術や芸術に関心ある観光客を引き付けている。

また「三次物怪まつり」の開催で、妖怪に関心を寄せる参加者が遠方からも大勢訪れるようになり、妖怪で町づくりを進める鳥取県境港市、徳島県三好市、大分県臼杵市、滋賀県東近江市などとも交流が進みつつある。

今後中国横断自動車道尾道松江線の全線開通により、この地を訪れる観光客の増加も見込まれることから、①より効果的な情報発信を行うこと、②三次町内と他の市内を結ぶモデルコースを策定すること、③市内広域に対応できるガイドの育成への支援、④周辺地域でのガイド組織の連携、の４点が今後の課題となる。

また、三次市内全域にわたる銀山街道や古代の古墳遺跡などの豊富な歴史資源の学術調査は進められているものの、観光資源として十分に活用されていないため、これらの活用のあり方も課題である。

(8) 今高野山と銀山街道（広島県世羅郡世羅町）

（資源の概要）

備後地域の中央部に位置する世羅町は農産物の生産地であり、休日を中心に観光農園での果物狩りや花卉鑑賞などで訪れる観光客でにぎわっている。中世に成立した備後国大田荘が後に和歌山の高野山に寄進され、その出先機関の役割を担う今高野山の門前町として発展した。また江戸期には石見銀山の銀を尾道に運ぶ銀山街道の宿場として栄えた。

こうした背景から同町には今高野山関連の価値の高い歴史文化資源が数多くある。寺社では中心となる龍華寺、丹生神社が知られるとともに、文化財では平安時代に造られた廃報恩寺の木造十一面観音立像および木造聖観音立像、龍華寺木造十一面観音立像２体の計４体が国の重要文化財に指定されている。また県や町によって指定された史跡、建造物、古墳、石造物、美術品などの文化財も数多く、この地域が歴史的に重要な地域であったことを示している。

（主な取り組み）

観光協会が作成するマップやパンフレットは農業観光中心、教育委員会が作成するマップは専門的内容の「文化財」が中心となっており、一般的な観光客に対する歴史文化資源マップは、今後の取り組みが待たれる状況である。農業観光が主体となっているため、主な観光インフラの整備は、農園など民間側が行っている。行政は道路標示や歴史案内看板などの整備を行っている。

また平成25年（2013）、多様な主体による協働のもと、景観、自然、歴史、文化等の地域資源や個性を活かした美しい国土景観の形成を図り、観光の振興や地域の活性化に寄与することを目的とする国土交通省の「日本風景街道」に、石見銀山から世羅を経て、銀の積み出し港であった尾道までを結ぶ銀山街道が認定された。これを契機として行政・民間それぞれが連携を深めており、広域的な地域づくりと官民協働となった沿線地域の活性化が進められている。

民間の地域づくり組織「広島・せらマルベリークラブ」は、ボランティアガイド活動も行っているが、古文書の勉強会を開催するなどガイドの資質向上に努めており、歴史文化を活かした観光を引き受けている。同組織は銀山街道の観光活用にも取り組んでおり、電動アシスト自転車で街道沿線を試走、シルバー人材センターと連携して道路の草刈りを行うなど地道な取り組みを展開している。

今高野山龍華寺境内

十一面観音と聖観音立像を祀る報恩寺

（成果・課題）

平成19年（2007）の観光客数約200万人（農業観光が主）をピークとして、微減が続いている。一方、仏像探訪を目的とする人や旅行会社が組む一部のバスツアーの中には、世羅町の仏像とともに北

広島町の古保利薬師を広域的に周遊する事例もある。このように仏像を軸に近隣との歴史文化観光資源連携を展開していくことが課題である。

また銀山街道沿線地域での連携をもとに、沿線をたどる広域の観光ルートを策定することともに、銀山街道にまつわる様々な資源の掘り起こしと活用が課題となる。その一環として、街道に沿った道をサイクリングコースとして開発することも考えられる。

もともと農業観光で多数の観光客が訪れる素地があり、農業資源と歴史資源とを多面的に結び付ける観光ルートの設定も課題となる。

尾道自動車道全線開通後、観光誘客に資するため、世羅インターチェンジ付近に道の駅を設置し情報発信の拠点にすることが計画されており、そこに立ち寄る観光客に向けた効果的な情報発信が期待される。

(9) 長登銅山跡と幕末の激戦地（山口県美祢市美東町）

（資源の概要）

山口県の東部に位置する美祢市は、カルスト台地「秋吉台」と日本屈指の大鍾乳洞「秋芳洞」が全国的に知られている。同市は鉱物資源に恵まれ、近代以降石炭、石灰石などを採掘する鉱業が発展した。現在も石灰石の採掘は大規模に行われており、観光資源として活用する産業観光に取り組んでいる。

一方、市内で最も東に位置する旧美東町では、近代以前から昭和37年（1962）まで銅の採掘が行われ、採掘坑跡が残されている。中でも長登銅山は奈良時代に開発され、奈良東大寺大仏鋳造のため銅を供出した国内最古の銅山であることが、平成元年～10年（1989～98）の発掘調査によって明らかとなった。

この地域は、江戸期に藩都萩と赤間関（下関）を結んだ赤間関街道中筋道が通る交通の要衝であり、幕末に、高杉晋作率いる奇兵隊をはじめとする諸隊が挙兵して萩正規軍を撃破し、その後の藩政を倒幕に向かわせることとなった「大田・絵堂の戦い」の激戦地として知られ、当時、奇兵隊が陣を置いた金麗社が史跡として遺されている。

（主な取り組み）

長登銅山は閉山後10年間荒れ果てた状態だったが、当時の美東町関係者が須恵器を発見したことがきっかけとなり、発掘調査が進められた。長登は「奈良上り」の訛りとの言い伝えもあった。その後の調査により、東大寺から出土した銅塊の成分分析が行われる一方、長登でも銅山が国直轄だったことを示す木簡が出土したことで、長登から奈良へ銅が搬出されたことが証明された。そしてそれ以降、簡易な展示場所で遺物の展示を行ったが、古代史ブームにより、長登銅山も脚光を浴びたことから、徐々に観光客が訪れるようになり、平成５年（1993）プレハブの展示場を建て、農水省の補助金をもとに平成21年（2009）、「長登銅山文化交流館」（愛称「大仏ミュージアム」）を開設した。また採掘坑跡周辺を整備して散策コースを設け、資料館職員による無料ガイドも行っている。

美祢市は、地質の保護と活用をテーマにするユネスコ「世界ジオパーク」の認定を目指す「Mine秋吉台ジオパーク構想」に取り組んでいる。これは、銅や石炭などの地質資源に加えて、明治維新関係の歴史資源も取り込んで進めることとしている。

閉山まで使われた長登銅山の炉の跡

大仏ミュージアムに併設された鋳造体験施設

大田・絵堂の戦いで奇兵隊が陣を置いた金麗社

平成27年（2015）には「大田・絵堂の戦い」150周年を迎えることから、地元民間で組織する委員会が、市の助成も得て、150周年記念式典・講演会の開催とガイドブック制作発行を計画している。観光協会も、明治維新ゆかりの地や地元の長登銅山も含む歴史スポットをチェックポイントに設定し、制限時間内でより多くのチェックポイントを回る屋外スポーツ競技「維新フォトロゲイニング」を主催し、「大田・絵堂の戦い」150周年に向けて盛り上げている。

美祢市は自然資源、歴史資源を結びつけることにより、観光の増加を図ろうとしている。

（成果・課題）

長登銅山に関する情報発信は学術的内容が主であるが、鋳造体験施設を設けたり、本格的に炉を用いて世界的にも稀な銅の精錬を行う催しも開催している。こうした体験的内容を評価して、年間５～６校の小学校が、秋吉台とセットで広島県や奈良県から修学旅行で訪れており、平成25年（2013）度、「大仏ミュージアム」の入館者は9,500人となった。ただし、案内や体験希望があっても、一度に対応可能なのは50人前後である。なお、旧美東町地域にボランティアガイドはなく、ボランティアガイド組織の組織化が課題である。

銅山をモチーフにした土産物などが民間によって開発され、道の駅みとうで販売されている。また銅山の名前を大きく表示し距離と方角を示す大型看板が地域内の幹線道路脇に設置され、情報発信の一助となっている。ただ近年この地域を縦貫する自動車専用道路が開通し、域内を素通りする車が増加したため、訴求効果を高めていくことが課題となっている。

「大田・絵堂の戦い」150 周年記念の年を迎え、ＮＨＫ大河ドラマ「花燃ゆ」も放映されているが、この機会をとらえた情報発信や、ジオパーク認定活動との連動などにより、観光協会や旅行会社と連携して、秋吉台を訪れる多くの観光客を地域全体に取り込むことが課題である。

第４章　歴史文化資源を活かした中国山地地域の観光振興

１．歴史文化資源を活かした観光振興の取り組みの現状と課題

(1) 現状

【市町アンケート調査より】

○時代ごとに特徴ある遺跡や遺構を有し、伝統文化を継承する歴史文化資源に厚み

中国山地地域の歴史文化資源は、古代から近世まで多岐にわたるが、特に、古墳、たたらなど特徴ある遺跡や遺構が存在する。戦国時代には有力大名もこの地域を本居地とし、その遺構も多い。加えて古くから伝わる郷土芸能をはじめとする伝統文化を継承していることが特徴となっている。

○さまざまなメディアを利用した情報発信

これまではマップ･パンフ等による情報発信に力点をおいた取り組みを行ってきた。一部の地域では、テレビなどマスディアの発信力を利用し、集客に効果を上げているところもある。

【事例調査より】

○住民が主導して行う歴史文化資源の掘り起こし

歴史文化資源の活用を図るうえで､住民の主体的な掘り起こし活動が大きな力を生むことが事例でも明らかとなっている。

三次市では地元で評価が低かった江戸時代の物怪物語をもとに、イベント、町並みづくり、地域連携交流などに活かすことで地域外からの注目を集めることに成功し、地域内での評価も高めている。

真庭市では住みやすい町づくりを目指す住民組織が発案して､歴史的町並み保存地区の家々を暖簾で飾るとともに､観光客も利用可能な休憩所を設置するなど主体的な町づくり活動を進めるとともに､行政へ町づくりに関する提言を行っている。

総社市では、地元有志が栽培した赤米を活かした観光商品開発、古来の製鉄技法の再現、新たに発見された古墳群の歴史公園化など様々な取り組みを行っている。

○行政が主導して行う歴史文化資源の掘り起こし

行政が主体的に動き地元に働きかけたり､地元で地道に活動している団体と協力して歴史文化資源の活用を進める事例も見受けられる。

智頭町では､観光カリスマでもある町長が町づくり構想を策定するとともに住民参加の仕組みづくりを進めている。具体的には、江戸時代の商家、明治時代の山林王である石谷家の住居を買い上げ、「石谷家住宅」として公開するなど歴史文化を活かした町づくりを行い、その場所を拠点としてコンサートやイベントを開催するなどして、域外からも人々を引き付けている。

美祢市では旧町時代から行政が先導して古代の銅山遺跡の歴史資源的価値を学術的な面から掘り起こす一方で､資料館を設置し観光拠点として古代産業技術を体験して学べる機能を付加することにより、域外からの教育的旅行需要を掘り起こしている。

（ソフト面）

○世界遺産、ジオパーク認定と連動した地域づくり

歴史文化資源が世界遺産となった地域では、登録を契機として観光客が増大し、それに対応した地域づくりも必要となっている｡また地域の自然資源を評価されることによって域内への集客を目指す地域では、世界ジオパーク認定に向けた活動を行う中で、自然資源と歴史文化資源を連動させた掘り起こし活動を展開している。

大田市では、ユネスコ世界文化遺産登録を契機として観光客が増大したが、大森の住民と協力して地域環境や住民生活を守りつつ、快適に観光できる町づくりを模索した。

美祢市では、世界ジオパーク認定を目指した活動を進める中で、石炭、銅などの鉱物、カルスト台地などの地質と、銅山跡のなどの歴史文化資源を結びつけることにより、深みのある地域であることを前面に出したアピールを行っている。

○まち歩きマップなどの情報媒体の整備

歴史的な町並み歩きを楽しむためのマップや、各種パンフレットなどが各地で整備されており、歴史文化資源の情報を発信するとともに、観光客の満足度を高めるツールとして一定の役割を果たしている。

○ガイド活動の推進とガイドの資質向上への取り組み

歴史文化資源の価値を来訪者に伝えるガイド組織が活動している地域が多いものの、組織自体がないところもある。ガイド活動の充実度には差があるが、新たなガイド人材を発掘する取り組みや、勉強会を開催して地元の歴史をより深く学び、ガイド能力を高めようとする取り組みがみられる。

ユニークな活動を行っている事例として、若桜町では地域の小学校５、６年生を募集して子どもガイドを養成する活動に取り組んでいる。観光客にも好評で、参加する子どもに対しても、地域の歴史を学びつつ地域への愛着を醸成させる役割を果たしている。また高梁市では、ベテランガイドがガイドする様子をビデオ教材化して研修を行い、ガイド能力の向上につなげる取り組みも行われている。

○観光客の満足度を高める料理や特産品の開発

料理や特産品開発の取り組みは、積極的に行われている地域もあれば、十分には行われていない地域もある。その背景には観光客数の違いがあり、観光客の数の多さがさまざまな商機を生んでいることがうかがえる。なお、商品開発の主体となっているのは、一般の製造業者だけでなく、地元の活動団体も関わっていることが特徴である。

○近隣地域との連携による広域周遊の推進

一つのテーマで歴史文化資源を広範囲に訪問する観光客は、一般に訪問先の自治体の行政区域を意識することはないため、行政区域を越えて連携し、振興を図ることが望ましい。

著名な観光エリアである「吉備路」は、岡山市北西部から総社市にかけての総称で、倉敷市の一部も含まれる。吉備路へ観光客を呼び込むため、岡山、倉敷、総社の３市は観光連絡協議会を結成して情報発信を行うとともに、３市のガイド組織も情報交換し、互いの地域に入っての案内なども行い、広域周遊を進めている。

（ハード面）

○歴史文化資源を活かした観光拠点施設の整備

観光地近傍の道の駅が観光拠点として活用され、道の駅が新たに観光拠点として構築されるケースが見受けられる。美祢市では長登銅山に近い道の駅みとうが、飲食を提供したり銅山土産などを販売している。また、世羅町では尾道自動車道全通に合わせ、世羅ＩＣ付近に新設される道の駅を情報発信拠点にすることとしており、これらの施設が域内観光の玄関口としての役割を果たすこととなる。

○駐車場やトイレ施設の整備

中国山地地域に訪れる手段としては観光バスや自家用車が圧倒的多数となっているが、駐車スペースは比較的確保されており、無料で駐車できる点が都市部にはないメリットとなっている。また町並

み散策が主体となる地域では、トイレ施設の整備も進んできており、ゆっくりと散策するうえでは良好な状況となっている。

○風致維持向上計画による文化財、建物、民俗芸能を一体とした保全活動
　補助金により建物の保全改修を行うことで町並みの維持を図る対応から一歩進めて、指定地域内の文化財、建物、民俗芸能などを一体として景観保全対象と位置づける歴史的風致計画推進地域がある。高梁市では高梁地区と吹屋地区の２地域を重点地域として、一体的な保存を行うと共に観光にもつなげていこうとする取り組みを行っている。

(2) 今後の課題

【市町アンケート調査より】
○歴史文化資源の掘り起こしとその活用を進めること
　歴史文化資源は充実しているという評価が大勢を占めるが、資源を余り活用していない地域が半数を超えている。観光や地域振興に歴史文化資源をいかに活用するかが課題である。

○歴史文化資源を活用した観光商品開発や受け入れ環境整備を進めること
　歴史文化資源を活用した取り組みとしては、これまでは情報発信を主としていたが、今後は観光商品開発や観光客の受け入れ環境整備が課題である。

【事例調査より】
○歴史文化資源と既存観光資源との連携
　中山間地という特性を活かし、歴史文化資源以外の地域資源が広く知られる地域があるが、そうしたところでは逆に歴史文化資源の掘り起こしが進んでいない。例えば、世羅町では貴重な歴史文化資源を数多く有する一方で、農作物やフルーツを目的に多くの来訪者がある。現在、歴史文化資源を目的に訪れる人が少ない理由のひとつに、歴史文化資源の情報発信不足がある。集客力のある域内資源に絡めて、いかに歴史文化資源に誘客するか、そのためのアイデア作りが課題である。

○継続的なイベントの実施
　飲食や物販機能が弱く、来訪者の飲食や買い物のニーズに応えることができないため、経済効果の面で限界がある地域が多いのが現状である。来訪者数を増やすためには、「城」「妖怪」など共通の地域資源をテーマとする他地域と連携した定期的なイベント実施が有効であることから、地域住民が主体となったイベント実施を継続的に連携して進めるなどのソフト面が課題になる。

○地域周辺での宿泊利便性の向上
　中国山地地域の観光地は、宿泊施設が少なく通過型で、訪問客は日帰りもしくは都市部に移動して宿泊するケースが多い。そのため域内に宿泊施設を新たに作る動機も発生しないという悪循環になっている。地域内での宿泊滞在客を増やすため、既存の民家を利用した民宿や民泊を用意し、地域ならではのサービスを提供することが考えられる。またその地域で宿泊施設を用意することが難しい場合、近隣地域と連携し宿泊のためのネットワークを構築することが課題となる。
○２次交通の改善
　中国山地地域という特性もあり、地域内の歴史文化資源が広い範囲に点在している。そうした各地点を結ぶ２次交通が十分に整備されているとはいえない地域が多く、大型観光バスが乗り入れできないことから、中型のバスに乗り換えたり、目的地まで徒歩に頼らなければならない地域もある。回遊

性を高めて集客増加を図るためには、２次交通の整備を行うことが課題となる。

〇町並み散策や観光地に至るための指標となる案内看板の整備

歴史文化資源の掘り起こしに取り組む各地域では、観光客が町並みを散策しやすくするため、また歴史文化資源のある地域に車などで訪れやすくするために、看板･サイン等の案内表示の整備が進められている。案内表示の整備にあたり、観光客を混乱させないよう、表示内容、デザイン、設置場所などの基準作りと統一的な整備が必要となる。またインバウンドに対応する表示の複数言語化が課題となる。

２．歴史文化資源を活かした中国山地地域の観光振興に向けて

歴史文化資源を活かした観光振興の現状と課題を踏まえ、今後の観光振興に向けて、地域において留意すべきことをとりまとめ、具体的な方策を例示する。

提言①　地域の町づくり組織と行政との連携により歴史文化資源の掘り起こしを進める

歴史文化資源を活かして観光振興を図る取り組みの出発点は、地域に埋もれている歴史文化資源を掘り起こし、磨く活動である。こうした活動は行政が行う以前から地元の有志による町づくり組織などが進めている事例が多く、行政もそうした活動と連携し、共同で取り組みを展開したり、支援することが重要である。

◇行政は、地域活動の中から掘り起こされ、磨きを掛けられつつある歴史文化資源を再評価し、地域住民や町づくり組織と連携して活動を進めていく。なお、そうした組織が先行的に活動を進めている場合は、行政はバックアップ役に徹することも効果的である。
◇行政が活動の発端となる場合は、地域自治組織などとの協力関係を構築するとともに、デザイナー、企業家など外部の専門家や地域外で実績ある人材の活用も効果的である。

提言②　来訪者を受け入れる総合的な環境整備を進める

歴史文化資源を掘り起こし、磨くことで、継続的に来訪者を受け入れるため、ソフト、ハード面でバランスの取れた総合的な環境整備が求められる。

◇歴史文化資源を来訪者にわかりやすく解説するガイド組織活動を推進する。
◇来訪者が容易に歴史資源に来訪できるよう、また町並みをゆっくりと回遊することができるよう、２次交通の整備、案内看板、駐車場、歩道等の基盤整備を進める。
◇地域と観光客との交流の場となる施設を整備する。
◇来訪者の満足度を高めるため、その土地ならではのストーリーをもつ料理や食物、特産品開発を進める。あわせて飲食店や土産物などの物販機能を整備する。

提言③　来訪者の滞在につなげるために近隣地域の宿泊施設を活用する

宿泊施設が少なく通過型となっていた地域において、歴史文化資源が活用され一定の集客が見込まれるようになれば、観光客の滞在を図るため、近隣地域の民宿・民泊などの活用を図ることが求められる。

◇農家などの民泊を利用して、地域内での宿泊の便宜を図るとともに、宿泊自体が地域文化を体験できるようなサービスの提供を行う。
◇歴史文化資源を有する市町村に宿泊施設がない場合、隣接する市町村と連携して民宿・民泊のネットワークを構築することで、近隣地域に滞在できる仕組みづくりを行う。

提言④　ガイドサービスの充実と人材育成を進める

来訪者の満足度を高めるには、歴史文化資源についての深みのある内容紹介が重要であり、ガイド

活動が大きな役割を果たす。一方、ガイド活動が活発な地域では、ガイドの高齢化と新たなガイド人材の育成が課題となっており、その充実を図る必要がある。

◇歴史文化講座とガイド体験講座などを連動して実施することで、新たなガイド人材の発掘を図る。
◇ガイドのノウハウを維持･継承するとともに、成功している地域の事例を他の地域でも参考にできる仕組みづくりを行う。域内に複数のガイド組織がある場合は広域的に連携し、情報交換しながら進める。
◇ガイド組織活動の持続性を高めるために、ガイドの有料化やガイドへの報酬支払いを進める。

提言⑤　歴史文化資源を活用した広域周遊ルートの形成を図る

集客力の拡大は、歴史文化資源の掘り起こしや資源磨きを進めている地域が単独で進めるのは困難であるため、近隣にある他の資源やテーマを同じくする資源同士をつないで、広域周遊ルートの形成を図ることが求められる。

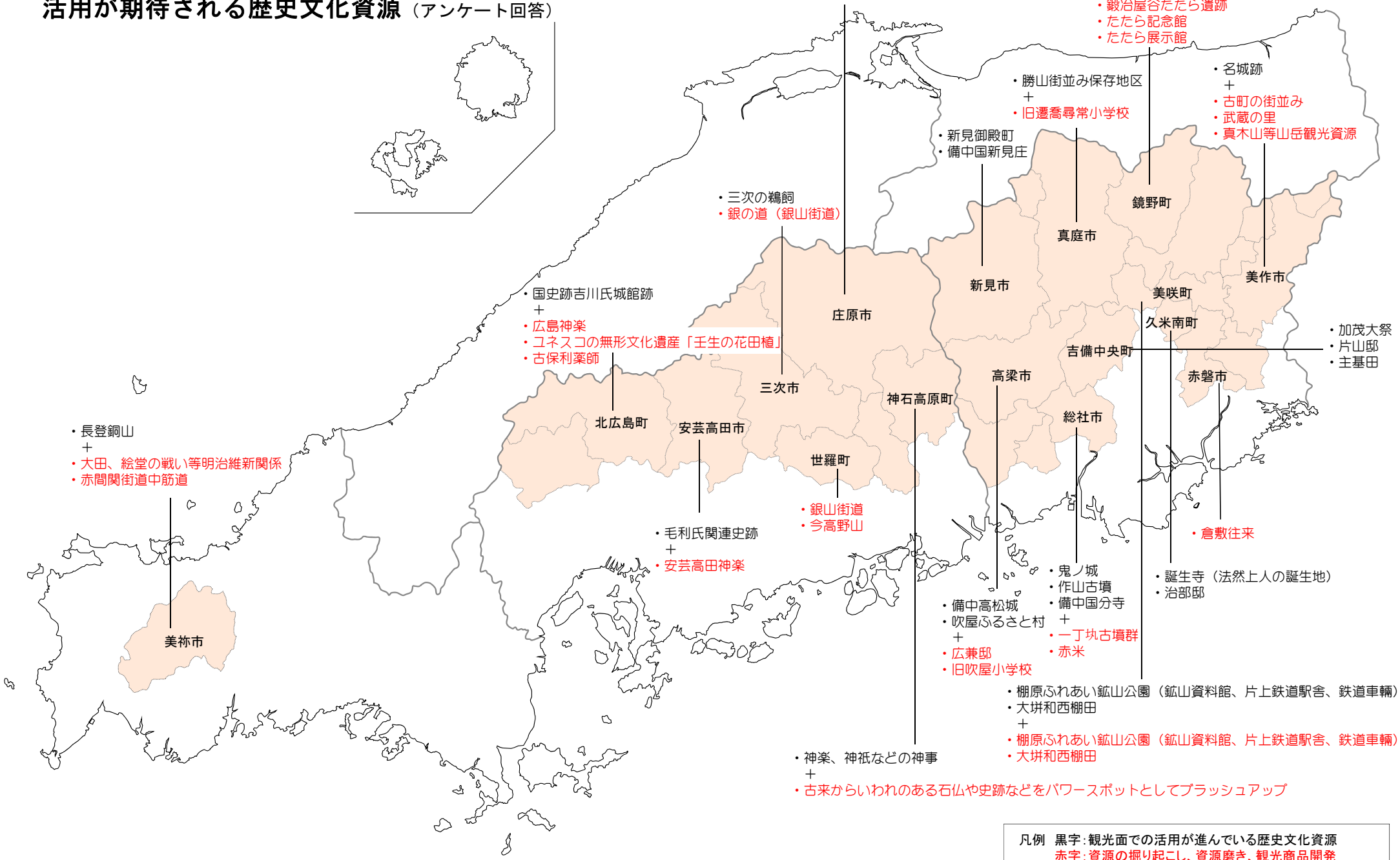
◇近隣の有名で集客力のある観光地の訪問客、周辺の資源へ周遊可能とするルートを形成する。
◇テーマを定めて連携を図り、広域周遊ルートを形成することにより、訴求力を高める。
（例）城めぐり、毛利氏、街道探訪など

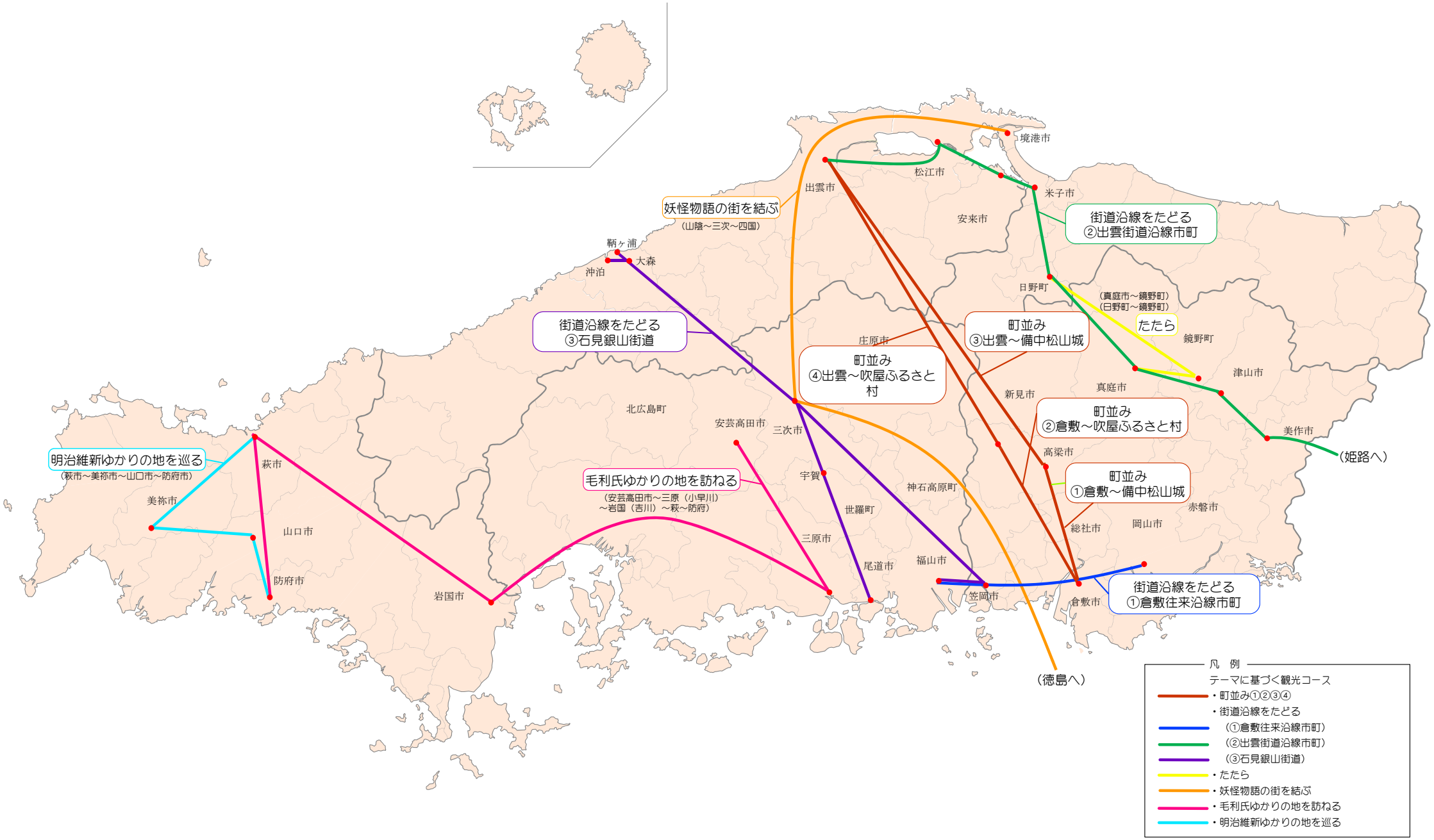
提言⑥　広範囲に効果的な情報発信を行う

平成 27 年（2015）年の中国横断自動車道尾道松江線の全線開通により、日本海方面、瀬戸内海方面はもとより四国方面からも中国山地地域を訪れる観光客の増加が期待できる。この機をとらえ、中国山地地域の歴史文化資源に関する情報を広範囲に発信することが重要である。

◇歴史文化資源訪問パンフレットなどを作成し、四国、山陽、山陰を結ぶ高速道路のパーキングエリア、サービスエリアや道の駅、鉄道の駅で配布する。
◇より広範囲に情報を伝えるため、ウェブサイトでの観光情報発信を行う。また、訪れた観光客が観光情報に容易にアクセスできる Wi-Fi 環境を整備する。

現在活用されている歴史文化資源および今後活用が期待される歴史文化資源（アンケート回答）



凡例　黒字：観光面での活用が進んでいる歴史文化資源
赤字：資源の掘り起こし、資源磨き、観光商品開発などに取り組んでいる歴史文化資源

望ましい広域テーマルート（アンケート回答）